

アイン・ランドの資本主義観

反ビジネス文学風土の中でビジネスマンを祝福する *Atlas Shrugged*

藤 森 かよこ

キーワード：資本主義，ヒューマニズム，個人の権利，
道徳と信頼，企業家精神

前もって本論文の要点を記述しておく。

- (1) リチャード・ホフスタッター (Richard Hofstadter) が、「大半のアメリカの知識人はビジネスを知性の仇敵ととらえてきた」(Hofstadter 233) と述べたことが示唆するように、アメリカの文学作品においてビジネスの体制である資本主義が批判されるのは、ほぼ習慣化している。しかし、そのわりには、資本主義そのものについて考察した文学作品というのは、筆者が知るかぎり、ほとんどない。
- (2) そうしたアメリカの文学風土の中で、アイン・ランド (Ayn Rand: 1905-82) は、資本主義とは何かとあらためて問う小説 = 資本主義を祝福する小説を発表した。self-made business men たちを賛美する小説を発表した。したがって、当然、主流言論界、学術界では、無視されてきた。
- (3) しかし、彼女の作品はアメリカの草の根の読者に愛読され続けてきている。さきに言及したホフスタッターは、アメリカには根強く反知性主義の伝統があることを指摘したが、アイン・ランドの根強い人気は、この文脈からも検討される必要がある。確かに、主流社会のコード、資本主義体制が求める思考や存在のありようを寿ぐ小説は、現実の資本主義社会にさらされる一般読者にとっては、単なる文化商品という消耗品以上の現実に適

応するための知識になりうる。しかし、それだけがアイン・ランドの根強い人気の理由ではない。その大きな理由に、彼女が作品の中で提示した「道徳としての資本主義」観、「人間の能力と善性と理性に立脚したものとしての、いまだ知られざる理想としての資本主義」観があげられる。

(4)アイン・ランドが定義する「道徳としての資本主義」観は、資本主義擁護言論のなかでも特異である。あまりに原理的で根本的で非歴史的である。人間性への高すぎる（と思われるような）期待と信頼を前提としている。資本主義と呼ぶより、ほとんど「人間讃歌」「ヒューマニズム」と呼ぶほうがふさわしい。ランドは過去の資本主義も現在の資本主義もほんとうの資本主義ではなく、みな似非資本主義であると断じた。ランドによれば、資本主義のもたらす問題は、資本主義ゆえに生じるものではなく、資本主義が足りないから生じるのだ。

(5)しかし、だからこそ、アイン・ランドの作品は、読まれ続けてきたし、これからも読まれ続ける。いかにほどに限界のある素朴で原理的な資本主義理解であろうと、ランドは、どんな政治経済体制であろうと、人間社会の経済体制の起源にあるものを、「信頼」を、あらためて指摘したからだ。それなくしては経済体制が機能しない前提を、人間としての権利を持つ個人と個人との間の搾取的でない関係、あるべき共同体のありようを、ランドは読者にあらためて認識させる。

では、この要点の順に論じていく。

The Road to Serfdom(1944)を書いたノーベル経済学賞受賞者フリードリヒ・アウグスト・フォン・ハイエク(Friedrich August von Hayek)によると、社会主義や共産主義ではない、(私たちが生きる)経済体制を「資本主義」と呼ぶのはmisleadingなのだ(Hayek,15)。資本主義という用語は、社会主義者の歴史解釈から生まれたものであり(1854年初出)、歴史の発展により捨て去られるべきもの、過渡的な遅れたものという意味を持たされて生まれた言

アイン・ランドの資本主義観
反ビジネス文学風土の中でビジネスマンを祝福する *Atlas Shrugged*

葉である。(来るべき未来のシステムとしての)社会主義という概念が生まれなければ資本主義という概念も生まれなかった。したがって、「資本主義」と私たちが口にするとき、前提として、私たちは、否定的意味合いを持たせてしまう。

社会主義は、理論上はさておき、実践されてみたら機能しなかったという歴史的事実があるにも関わらず、私たちは、「とりあえず受け入れて生きていくしかないシステム」だから、これ以外のシステムは思い浮かばないから、とりあえずは受け入れるという姿勢を、資本主義というものに対して無意識のうちにとっているのではないだろうか。

これは、「所与のもの」として自然環境のように資本主義を受け入れているということでもなく、意識してはいるのだが、その自分の意識の内容をつきつめるわけでもなく、資本主義がどういうものであるか言語化しようという気もないという態度である。怠惰な思考停止の態度である。資本主義というシステムは、ほんとうのところは、私たちにとって、根本的には苦にならないシステムだからこそ、きちんと考えることを怠り、思考停止しているのではないだろうか？つまり、怠惰にして思考停止していて構わないぐらいに、根本的には居心地のいいシステムなのではないのかと、ひょっとしたら、そうなのかもしれないとここで疑ってみるのも、無意味なことではないだろう。

上記のようなことを筆者に考えさせたのがアイン・ランドである。彼女は、1926年にソ連からアメリカに亡命し、1929年のニューヨーク株式大暴落から始まった大不況期、つまり人々がソ連の社会主義に希望を託しつつあったRed Decadeといわれた1930年代に、ソ連の体制を告発する作品 (*We the Living*) を書くことで、作家活動を始めた。

不況期の失業対策として設置された機関である公共事業促進局(雇用促進局 *Work Progress Administration*、後に *Work Projects Administration* と改称、略称 *WPA*)の中に、究極的には個人の才能から生まれる文化的生産物である芸術活動を管理促進するようなプロジェクトまで入れ込むような、New

Dealsの集団主義志向に抵抗する孤高の天才建築家を主人公にした『水源』(*The Fountainhead*) という小説を1943年に発表した(Szalay ,75-161)。

第二次大戦後には、公共の福祉という大義名分のもとに、個人の自由を抑圧し、所有権を否定して、計画経済のために機能しなくなるアメリカを捨て、秘密結社のような新生アメリカをコロラド山脈の中に形成する産業資本家や企業家や突出した才能を持つ人々や発明家たちを描いて、資本主義を祝福する小説『肩をすくめるアトラス』(*Atlas Shrugged*)(1957) を発表した。

折島正司が、「文学や批評の振る舞いは、基本的には、主流のビジネス文化に対する外側からの批判あるいは反抗だった」(折島 ,9) と述べているように、アカデミズムの主流が、反産業資本、反企業、反エリート、「犠牲者としての大衆像」を提供するという姿勢をとった時代に、こういう物語を発表した。だから、言うまでもなく、アイン・ランドは主流アカデミズムや主流言論界においては、長く黙殺されてきた。保守主義や自由至上主義 (*libertarianism*) の文脈から、政治思想分野において限定的に論じられるだけであった。作家では、デーン・クーンツ (*Dean Koontz*) やスティーヴン・キング (*Stephen King*) などのエンターテインメント系作家が認めてはきたのだが (*Koontz* 296-97) (*King* ,173) 。

1991年のソ連崩壊以後は、アイン・ランドの社会主義批判、計画経済批判、国家管理経済批判は正しかったということになり、学術的にもとりあげられることが増えてきたが、もっかの現在は、新自由主義 (*Neo Liberalism*) 批判の文脈からアイン・ランドは批判されている。このことについては、後ほど再び言及されるであろう。

本論の目的は、アイン・ランドの資本主義観の考察であるが、アイン・ランドの代表作 *Atlas Shrugged* を題材にすることによる、つまり、ランドの資本主義観の内容を明示することによるアイン・ランド擁護が、本論のもうひとつの目的である。

Atlas Shrugged について言及する前に、アイン・ランドの文学観を確認す

アイン・ランドの資本主義観
反ビジネス文学風土の中でビジネスマンを祝福する *Atlas Shrugged*

る。ランドにとっては物語と思想は不可分なものだった。ランドは、物語はある思想を土台にし、その思想を生きる人物を造形提示し、その人物の思想が優れていることを納得させるプロットを用意するのが作家の機能だという、19世紀的に素朴な文学観の持ち主だった。ランドは日記（1946年5月4日）に、以下のように書いている。

In my own case, I seem to be both a theoretical philosopher and a fiction writer. But it is the last that interests me most; the first is only the means to the last; the absolutely necessary means, but only the means; the fiction story is the end. Without an understanding and statement of the right philosophical principle, I cannot create the right story; but the discovery of the principle interests me only as the discovery of the proper knowledge to be used for my life purpose, and my life purpose is the creation of the kind of world (people and events) that I like, i. e., that represents human perfection. Philosophical knowledge is necessary in order to define human perfection, but I do not care to stop at the definition; I want to *use* it, to apply it in my work (in my personal life, too .but the core, center and purpose of my personal life, of my *whole* life, is my work). (Rand (g), 479.)

（訳：私の場合、理論的思想家であるし作家でもあるみたいだ。だけど、私をもっともひきつけるのは作家のほうだ。思想家のほうは作家であるための手段でしかない。でも絶対に必要な手段だけだ。それでも手段にしかすぎない。作家が目的なんだから。正しい哲学的原則をちゃんと理解して述べなければ、正しい物語は生み出せない。それでも、私の人生の目的のために使用される妥当な知識を見出すために、哲学的原則を見つけることだ。私の人生の目的は私が好きな世界を創造することだもの。つまり、人間的完璧さを表現する世界。そういう世界。哲学的知識は、人間的完璧さを定義するために必要。だけど、私は定義しただけで、そこでとまる気はない

から。私は、私の作品に適用させるために、哲学的知識を使いたい。私の個人的生活においても。だけど、私の個人的生活、私の人生全体の核心は、中心にあるのは、目的は、私の作品。)

また、*The Romantic Manifesto*というエッセイ集におさめられた“The Goal of My Writing”という文のなかでは、このように書いている。

The motive and purpose of my writing is *the projection of an ideal man*. The portrayal of a moral ideal, as my ultimate literary goal, as an end in itself to which any didactic, intellectual or philosophical values contained in a novel are only the means. Let me stress this: my purpose is *not* the philosophical enlightenment of my readers, it is *not* the beneficial influence which my novels may have on people, it is not the fact that my novels may help a reader's intellectual development. All these matters are important, but they are secondary considerations, they are merely consequences and effects, not the first causes or prime movers. (Rand(f), 162)

(訳：私が書くことの動機と目的は、理想的な人間を表出することである。道徳的な理想を描くことである。私の究極の文学的目標として。それ自身を目的として。小説に、教訓的な知的な哲学的な価値観が表現されているとしても、それがどんなものにせよ、理想的な人間を表出するための手段でしかない。このことは強調させていただきたい。私の目的は、読者を思想的に啓蒙することでは断じてない。小説が人々に与える有益な作用を、私は目的としていない。私の小説が読者の知的成長を手助けする可能性があるという事実が目的でもない。これらのことは重要なことではあるが、考慮するとしても二次的なことであり、単に結果であり効果でしかなく、第一の原因でもなく最初の動機でもない。)

アイン・ランドの資本主義観
反ビジネス文学風土の中でビジネスマンを祝福する *Atlas Shrugged*

平易に言い換えれば、アイン・ランドは「知的にも情緒的にも道徳的にも自分が理想と思える人間が、一番魅力的に見えるような物語を書きたい！自分が会いたい世界、生きたい世界を描きたい！自分が読みたい物語を書きたい！」と言っているのだ。作家として、実に素朴に正直で健康な欲望ではないか。

では、このような作家は、どのような物語を書いたのか、*Atlas Shrugged*の内容を確認する。*Atlas Shrugged*の表題のアトラスとは、ギリシア神話の天球を支える巨人アトラスのことである。簡単に述べれば、この世界の政治や経済や文化を支えている頭脳と才能と責任感を持った人間が、彼らや彼女らの能力に依存し、それを搾取する人々に自分たちを搾取させるがままにしないで、「ストライキ」を始めたら、この世界はどうなるか、つまりこの世界を支えるアトラスのような人々が「もうやめた」とばかりに「肩をすくめた」ら、この世界はどうなるか？というのが、この小説内容である。

*Atlas Shrugged*は、ペーパーバック版でも1063ページある長編小説であり、プロットも複雑で登場人物も非常に多く、ヒーローと目される登場人物でさえ4人もいる。この小説が、「ジョン・ゴルトって誰？」(“Who is John Galt?”)という文で始められているように、この小説を推進する主要プロットは、ヒロインのダグニー・タッグアート (Dagny Taggart) が、このジョン・ゴルトが誰なのか、何を目論んでいるのかを追求する謎解きである。時代は具体的に設定されていないが、20世紀の終わり近いあたり。ヒロインを中心にプロットを要約してみる。

ダグニーは、無一文から祖父ナサニエル・タッグアート (アメリカの鉄道王エドワード・ハリマンがモデルらしい) が設立し発展させたアメリカ屈指の大鉄道会社「タッグアート大陸横断鉄道」(Taggart Transcontinental Railroad) (以後 T T R と記す) の鉄道運行部門担当副社長である。34歳の若さながら、無能な社長の39歳の兄ジム (James Taggart : モデルはエドワード・ハリマン

の息子で、アヴェレル・ハリマンらしい)を歯牙にもかけず、大鉄道会社を運営している。少女時代から、彼女とこの鉄道会社は一体だった。代々発展してきたこの鉄道会社は、人間の可能性と有能さと責任の象徴だった。それらの美德がなければ列車の正常な運行はできないからだ。創業者の孫娘という立場を秘めて、TTRの駅の夜勤電話番をアルバイトで勤めるほど、彼女は鉄道のすべてを熟知したがった。だから、大学でも工学を学んだ。

最近、彼女は、列車の車掌から鉄道技師から、銀行家や音楽家や法律家など、どの分野職種においても、優秀な責任感豊かな人材に限って仕事を辞めて失踪してしまうことが多くなっていることに気がついている。そのために、以前では守られていた物資の納期とか工事の進展とか、鉄道の安全な管理などのシステムが正常に機能しなくなっている。

それに加えて、人間の創意工夫と努力を促す自由競争による社会の発展を信じるダグニーが危惧しているのが、政府の政策だった。政府は、自由競争を排した資本主義経済体制から、発明家や産業家や労働者が努力と頭脳で獲得した利益を国家が管理して「必要に応じて」国民に分配し、国民みなが繁栄できる「協同的共生社会」を実現する経済体制へ移行しようとしている。その大義の実現のために、政府が採る政策は、次のようなものである。適者生存の弱肉強食の企業間競争を排するために新奇な製品を発明して売り出したり、新事業を開拓することを制限する「反競争法」(Anti-Dog-Eat-Dog Rule)の施行。優れた製品やサービスを提供できる企業は独占的になり公共の福祉に反するので、すべての会社にとって規模に応じて必要な利益が得られるようにする「機会均等法」(Equalization of Opportunity Bill)の実施。社会の安定した全体的協同的發展のために、労働者や従業員の流動化を避けるために、離職や転職や解雇を禁じる「10-289号指令」(Directive 10-289)の発令と徹底。ダグニーの兄は、自分の無能さを思い知らせる有能な産業家、企業家たちへのルサンチマンから、政府に加担して行く。彼は自分が楽に怠惰に生きて、社長の地位と金が保証されればいいと考えるだけの卑劣な人間なので、口では「最大多数の人々の幸福の実現が正義」だと唱える。

アイン・ランドの資本主義観
反ビジネス文学風土の中でビジネスマンを祝福する *Atlas Shrugged*

アメリカの産業は徐々に衰退し、労働者は労働意欲をなくしていく。と同時に、前からの現象であった「人材の失踪」に拍車がかかり、TTRを含めたどの産業、商業分野も無責任と責任転嫁と無能がはびこり、投げやりな人々のみが残される状態となっていく。社会の停滞と不安と増していく混乱の中で、人々の間には、答えようもない問題には“Who is John Galt?” という奇妙な習慣が、いつからかできあがっている。

ダグニーは、そのジョン・ゴルトこそ、社会から有能な人材をどこかへ流出させる「破壊者」だと考えるようになる。ダグニーは、その破壊者から自分の鉄道会社を守らなければならない、最後までその破壊者と闘わなければならないと決意する。

愛人の鉄鋼会社経営者で奇跡の合金リアーデン・メタルの発明者ハंक・リアーデン（アンドリュー・カーネギーがモデルらしい）と出かけた休暇の旅行中にダグニーは、廃業された大自動車工場の廃屋に打ち捨てられたモーターの残骸を見て驚愕する。工学を専攻した優秀なエンジニアでもあるダグニーには、それが現行の輸送機関の問題をすべて解決できるような前代未聞の画期的モーターの完成品が人為的に破壊されたものとわかったからだ。その未来を開くモーターの設計者をつきとめるために、ダグニーは様々な調査をするが、その設計者はわからない。

そのモーターの設計者こそ、ジョン・ゴルトだった。彼は勤めていた大自動車会社が売却され、新しい経営者が「能力に応じて労働し、必要に応じて収入を得る」システムを導入し理想的な共同社会としての新しい企業を作りたいと発表した時に、会社を辞めた。自分が設計して完成させたモーターを破壊して失踪した。能力のある者は労働過剰になるばかりで、収入は労働量や功績ではなく、家族数などの必要に応じて分配され、それも労働者の投票で決定されるという全体主義的システムのために、この自動車会社は、倒産する。なぜならば、有能な者の辞職と故意の怠慢が多くなり、無能な者は収入が保証されているので一層に怠惰になり、また労働者間の嫉妬反目（同僚の結婚や出産は、自分の収入の減少につながるから）は増大し、息の詰ま

るような相互監視の環境は、生産性を激減させ、労働者の志気を壊滅させたからだ。この現象を予測して早々と会社を捨てるだけの見識と勇気を持った男についての噂が、“Who is John Galt?” という流行りことばの起源になった。つまり、「ジョン・ゴルトって誰?」「知らない」「答えのわからないことを言うなよ。わかるはずない」と変化した。

ジョン・ゴルトは、有能な人間の能力を搾取して、有能な人間の美德を利用して自分は楽をして生きようとする寄生虫の人々に汚染されていく社会に見切りをつけて、新しい社会を創設しようと、賛同者を募ってコロラド山中に別社会を建設する。この新世界、ゴルト峡谷のメンバーは、以下のことばを誓う。「私は、私の命を賭けて、私の命への愛を賭けて誓う。私は他人のために生きることは決してしない。また他人に私のために生きるよう依頼することは決してしない。」(“I swear by my life and my love of it that I will never live for the sake of another man, nor ask another man to live for mine.”)と。

この別天地「ゴルト峡谷」(Galt's Gulch)の人々は、この新世界にふさわしい人物を探し救出するために、「旧世界」では人目につかない労働で社会に埋もれながら活動していた。ゴルトは、10年以上もダグニーの鉄道会社の下級労働者をしながら、いずれダグニーをも「新世界」に誘うつもりで彼女の行動を監視していた。真相を知って驚くダグニーだが、祖父から伝わる鉄道会社を見捨てることはできない。

社会はさらに停滞、混乱し、物資の輸送や交通が麻痺する。農産物や工業製品も生産量が減少し、かつ生産地から消費地の都会まで物資は流通しなくなる。電力などエネルギー資源の管理、利用システムも壊滅しつつある。ゴルトは全米へのラジオ放送を通じて、新世界樹立の必要性、旧世界の搾取的構造破棄を唱えて彼と彼の仲間の大義を国民に伝える。政府はあわてるが、混乱した社会に秩序をもたらす人材が政府機関にはいないので、ゴルトと妥協を図ろうとするが、彼は拒否する。政府機関は彼を逮捕して拷問にかける。ダグニーや「新世界」の仲間たちは、ゴルトを救出する。ダグニーも、

アイン・ランドの資本主義観
反ビジネス文学風土の中でビジネスマンを祝福する *Atlas Shrugged*

ついに旧世界に絶望し彼らと行動をとともにすることになる。システム機能不全のために混乱は一層拡大し、その收拾をつける責任ある機関も人材も旧世界にはない。繁栄を極めたニューヨークにすら大停電が起き、アメリカ合衆国は破滅の道をたどる。しかし、ゴールトたちにとって、この終末こそが、アメリカの破滅こそが、「彼らのアメリカ」建国の真の始まりとなる。

この長編小説を批判するのは非常に簡単である。ソ連的なものに侵食されつつある第二次世界大戦後冷戦期のアメリカの危機を描いた政治経済思想小説にしては、善と悪の闘争の様子が、あまりに寓話的で、かつ漫画的だ。人物造形にせよ、悪役はあまりに他愛なく幼稚に卑劣で、主人公たちはスーパーヒーロー、スーパーヒロインでありすぎる。航空機時代に主たる舞台が鉄道会社と鉄道というのも時代錯誤で近未来SF小説にもなっていない。まさに「つつこみどころ」満載なのだが、その問題は本論のテーマとは直接には関係ないので、ここではこれ以上言及する必要がない。

ただ、この小説が20世紀を舞台にしなが、財閥形成期、産業資本形成期の19世紀後半の色彩が濃厚であることには注目しなければならない。アイン・ランドが小説で祝福しているのは、単なるビジネスマン（日本で言うビジネスマン＝サラリーマンでは、むろんない）ではなくて、自らが造り上げ生み出すビジネスマン、創造する企業家、産業家たちである。より正確に言えば、アイン・ランドが描き寿いだビジネスマンとは、「自ら汗して経営とinnovationに勤勉にはげむ中小企業の創業者社長」的存在だということである。

こうなると、アイン・ランドの考える「資本主義」が、どのようなものであるか、かなり見当がついてくる。その前に、彼女の資本主義観の土台となる世界観、思想を整理したい。

アイン・ランドは自らの思想をObjectivismと呼んだ。以下の引用文は、ランドが1962年から65年まで定期的に出版していた『客観主義会報』(*The Objectivism Newsletters*) の1962年、8月号通算35号にランドが書いた「客観主義とは何か」(“Introducing Objectivism”) と題した文からの抜粋である。

1. Reality exists as an objective absolute facts are facts, independent of man's feelings, wishes, hopes or fears.

2. Reason (the faculty which identifies and integrates the material provided by man's senses) is man's only means of perceiving reality, his only source of knowledge, his only guide of action, and his basic means of survival.

3. Man every man is an end in himself, not the means to the ends of others. He must exist for his own sake, neither sacrificing himself to others nor sacrificing others to himself. The pursuit of his own rational self-interests and of his own happiness is the highest moral purpose of his life.

4. The ideal political-economic system is laissez-faire capitalism. It is a system where men deal with one another, not as victims and executioners, nor as masters and slaves, but as traders, by free, voluntary exchange to mutual benefit. It is a system where no man may obtain any values from others by resorting to physical force, and no man may initiate the use physical force against others. The government acts only as a policeman that protects man's right; it uses physical force only in retaliation and only against those who initiate its use, such as criminals or foreign invaders. In a system of full capitalism, there should be (but, historically, has not yet been) a complete separation of state and economics, in the same way and for the same reasons as the separation of state and church. (Binswanger, Harry. ed. 344)

(訳)

- 1 リアリティとは、客観的絶対物として存在している。事実は事実だ。人間がどう感じようと、願おうと、希望しようと、恐れようと。

アイン・ランドの資本主義観
反ビジネス文学風土の中でビジネスマンを祝福する *Atlas Shrugged*

- 2 理性（人間の感覚によって供給された素材を認識し（identify）統合する機能）は、人間が現実を認知する唯一の手段であり、知識の唯一の源泉であり、行動への唯一の指針であり、サバイバルの基本的手段である。
- 3 人間は、どんな人間でも、自分自身そのものが目的である。人間は、決して他人の目的の手段ではない。人間は、自らのために存在しなければならない。自分を他人のために犠牲にしたり、他人を自分のために犠牲にしてはならない。自分自身の理性的自己利益と自分自身の幸福の追求こそが、人間の人生の最高の道徳的目標である。
- 4 理想的な政治経済システムは自由放任（無干渉）資本主義である。それは、人間が犠牲者と搾取者でなく、主人と奴隷ではなく、相互利益のための自由で自発的な交換によって、交易者（trader）として、取り引きするシステムである。それは、物理的力に訴えることによって他人から価値あるものを奪うことなど誰もできないシステムである。誰も他人に物理的力の利用を行使しないシステムである。政府は、人間の権利を守る警官としてのみ行動する。犯罪者や外国からの侵略者のように、物理的力を行使する人々に対しての反撃としてのみ報復としてのみ、政府はその物理的力を行使する。十全な資本主義体制のもとでは、国家と経済の完全な分離が（まだ歴史的には実現されていないが）なされるべきである。同様に、また同じ理由で、国家と教会の分離もなされるべきである。

ランドのエッセイ集なども参考にして、この思想をパラフレーズすると、以下ようになる　世界は人間の思惑とは関係なく存在する客観的な絶対物である。人間は、世界を認知し把握することができるが、それを創造することも変えることもできない。したがって、唯心主義や唯我主義はもちろん、

超自然的なものへの信仰は否定される。人間の理性（reason）とは、人間の諸感覚が捉えた物質をそれと確認し（identify）他の事物と関連付け統合する（integrate）機能である。理性だけが、人間が絶対的客観物である世界に対処して生き抜く知識を獲得する手段である。行動への適切な指針である。

したがって、信仰や感情を知識獲得の手段とする神秘主義や、確実な知識は人間には獲得不能なものという懐疑主義は否定される。しかし、理性の行使は個人の選択にかかっている。人間が自らの人生や人格を形成し決定するもろもろの選択すべては、人間の頭脳（mind）の選択の自由によって決定される。だから、人間は、神とか運命とか育ちとか遺伝子とか経済状況とかの犠牲者であるとする決定論はすべて否定される。

そもそも人間の人生の目的とは何か？それは、その人間の人生そのものである。人間は、合理的な自己利益のために働き、自分自身の人生という最高の道徳的目的としての幸福を達成しなければならない。したがって、他人や社会のために生きる自己犠牲を称揚する利他主義は否定される。このような人間が他人と関わるありようは、「交易者」「商人」（trader）どうしのそれである。自由な、相互利益のための相互の合意による、互いの持ち物＝互いが持っている価値あるもの（values）を交換しあう者どうしの関係である。搾取や横領を許さない関係である。

これらを支持する経済体制は、自由放任資本主義である。個人間の合意のうえでの交換関係、商人どうしの合理的な自己利益に基づく交換行為に干渉し、介入する存在は排されなければならない。こうした「商人」どうしの関係を保護する政治体制は、夜警国家である。物理的強制力によって他人から価値あるものを奪う権利など誰にもない。政府とは、所有権を含む個人の諸権利を保護するためにのみある。したがって、集団の利益、共通善という大義をふりたてて、個人の生命と自由と幸福の追求を抑圧する全体主義やあらゆる形式の集産主義、集合主義（collectivism）は否定されなければならない。

。

アイン・ランドの資本主義観
反ビジネス文学風土の中でビジネスマンを祝福する *Atlas Shrugged*

以上のように、アイン・ランドは、ダーウィンの進化論を経過したあとの神なき自然に対処して、個人の人間がどう生きれば、より良く生き延びて人生をまっとうさせることができるのか、というきわめて根本的で切実な問題意識から思考を始め、論理的帰結として、個人の生きる権利の行使をもっとも保護できる政治経済体制としての「自由放任資本主義」に行き着いた。

これは、資本主義を無自覚に所与のものとして受け入れている人間にはできないことだ。アイン・ランドは、自由な思考が基盤である作家の資質を持つ人間として、帝政ロシアの商業資本主義社会から、社会主義国家計画経済システムを体験し、1920年代のアメリカの資本主義を体験し、大不況期の左傾化したNew Deal期を通過した。「資本主義を知っていながら、資本主義の外部に立ち、また資本主義社会に入り、資本主義の危機を目撃する」というランドの経歴は、資本主義を自然環境化する思考停止状態をランドに回避させた。

ここで、人間の理性や主体性に対して疑いのないアイン・ランドの姿勢の、これもまたきわめて19世紀的というより、18世紀の建国の父たちの理念との類似を指摘して、彼女の見解は伝統的アメリカの政治経済思想の反復であり、特異でもなんでもないと早々と断じる前に、アイン・ランドの資本主義観と、その前提となる世界観を、もう少し丁寧に検討してみよう。ランドは、*Capitalism: The Unknown Ideal*というエッセイ集の中で、「資本主義とは所有権を含めた個人の諸権利を認めることに立脚した社会制度。この制度のもとでは、すべての財産は私的に所有される。」(Capitalism is a social system based on the recognition of individual rights, including property rights, in which all property is privately owned.)(Rand(e) 19)と簡潔に定義しているが、これだけでは理解しにくいので、以下の引用文を見てみよう。

A pure system of capitalism has never yet existed, not even in America; various degrees of government control had been undercutting and distorting it from the start. Capitalism is not the system of the past;

it is the system of the future if mankind is to have a future. (Rand (d), 37)

(訳：純粋な資本主義制度というものは、いまだかつて存在したことがない。アメリカでさえ、そうである。政府による規制が様々な程度にあり、それは最初から資本主義というものを切り崩し、歪めてきた。資本主義は過去の制度ではない。未来の制度である。ただし、人類に未来というものがあればの話だが。)

Money is a tool of exchange, which can't exist unless there are goods produced and men able to produce them. Money is the material shape of the principle that men who wish to deal with one another must deal by trade and give value for value. Money is not the tool of the moochers, who claim your product by tears, or of the looters, who take it from you by force. Money is made possible only by the men who produce. Is this what you consider evil? (Rand (b), 382)

(訳：カネとは交換の手段です。もし生産される物がなければ、人間が物を生産できなければ、存在しないのが交換です。他の人間と取り引きしたい人間が、交易によって取り引きするという行為、つまり価値ある物を得るために別の価値ある物を与えるという行為の原則の物質的形がカネです。カネは、たかり屋の道具ではありません。たかり屋は哀れっぽく泣いてあなたの生産物を所有することを主張します。カネは、また略奪者の毒でもありません。略奪者、不正利得者は、あなたからあなたの生産物を暴力で奪います。カネとは、生産する人間によってのみ可能にされるものです。これを、あなたは悪とおっしゃいますか？)

To the glory of mankind, there was, for the first and only time in history, a country of money and I have no higher, more reverent tribute to pay to America, for this means: a country of reason, justice,

アイン・ランドの資本主義観
反ビジネス文学風土の中でビジネスマンを祝福する *Atlas Shrugged*

freedom, production, achievement. For the first time, man' mind and money were set free, and there were no fortunes-by conquest, but only fortunes-by-work, and instead of swordsmen and slaves, there appeared the real maker of wealth, the greatest worker, the highest type of human being-the self-made man the American industrialist. (Rand (b), 384)

(訳：人類にとって幸いなことに、史上で唯一初めて、お金の国が出現しました。このことによって、道理、正義、自由、生産、業績の国たるアメリカにこれ以上高く敬虔な賛辞を私は奉げられませんよ。はじめて人間の精神と金は解放され、征服による財産がなくなって、仕事による財産だけになり、殺し屋と奴隷のかわりに真の富の生産者であり、最高の労働者であり、最高に高邁なタイプの間人、つまり独立独行のたたきあげの間人、つまりアメリカの実業家が生まれたのです。)

The symbol of all relationships among such men, the moral symbol of respect for human beings, is the trader. We, who live by values, not by loot, are traders, both in matter and in spirit. A trader is a man who earns what he gets and does not give or take the undeserved. (Rand (b), 940)

(訳：そのような人間たちの関係を象徴するのが、人間に対する敬意を道徳的に象徴するのが、商人です。我々は、価値によって生きるのではなく、略奪によって生きるのではないから、精神的意味においても物質的意味においても、商人です。商人とは、自分が手に入れたものを手にする人間のことで、つまり自らの努力で手にしたものの対価を稼ぐ人間のことで、自分が得るにはふさわしくないものをやりとりする人間ではないのです。)

Your kind of intellectuals are the first to scream when it's safe and

the first to shut their traps at the first sign of danger. They spend years spitting at the man who feeds them and they lick the hand of the man who slaps their drooling faces. Didn't they deliver every country of Europe, one after another, to committees of goons, just like this one hear? Didn't they scream their heads off to shut out every burglar alarm and to break every padlock open for the goons? (Rand (b) 504.05)

(訳：君の言うところの知識人というのは、安全なときには、真っ先にギャアギャア叫んで、危険が近づいたら、真っ先に黙り込む輩だ。自分たちを食わせてくれる人間たちに長年もツパをはきかけて、自分のよだれ顔をたたく人間には媚びへつらう。知識人というのは、ヨーロッパの国々を次から次へと、ここと同じろくでもない委員会とやりに引き渡したのではなかったか？その連中のために、声を嗶らして叫んでやって、盗難警報機をとめて錠をはずしたのではなかったか？)

This is the age of the common man, they tell us-a title which any man may claim to the extent of such distinction as he has managed not to achieve. He will rise to a rank of nobility by means of the effort he has failed to make, he will be honored for such virtue as he has not displayed, and he will be paid for the goods which he did not produce. But we-we, who must atone for the guilt of ability-we will work to support him as he orders, with his pleasure as our only reward. (Rand (b) 679)

(訳：現代は庶民の時代だそうだ。庶民とは、卓越した業績をあげなかった程度に応じて誰もが主張することができる称号だ。庶民は、できなかった努力によって地位が上がり、示すことができなかった美徳のために尊重され、生産できなかった商品のために報いられる。だが、我々は、有能であるという罪を持つがゆえに、その罪を償わなければならない我々

アイン・ランドの資本主義観
反ビジネス文学風土の中でビジネスマンを祝福する *Atlas Shrugged*

は、庶民の命じるままに、庶民の快樂を唯一の報酬として、庶民を支えるために働くことになる。)

上記の引用文から、アイン・ランドの資本主義観と、その前提となる世界観を、筆者なりにパラフレーズすると、以下ようになる。

- (1) 人間AがA自身の知力体力の発揮 = 労働により生産し獲得したものと、人間BがB自身の知力体力の発揮 = 労働により生産し獲得したものを、AとBそれぞれの利益にかなうので、合意にいたり交換する行為を、いつでもどこでも自由に実施する自由があり、かつその自由が守られるシステムが資本主義である。また、自身の知力体力の発揮 = 労働により生産し獲得したものに対して持つ権利 = 所有権こそ、人間の尊厳を守り個人の尊厳を守るものである。個人の所有権を守るシステムは資本主義である。だから、資本主義は正しいシステムである。
- (2) このような交換関係が人間間に成立するということが、交換しあうことができるような価値あるものを生産できる能力を人間が持っていることを前提としている。同時に価値あるものを互いの合意のもとに交換することができるような信頼関係を人間が形成できるということを前提としている。この二点において、合意による交換関係を土台にする資本主義体制は、人間の理性と能力を証明するものであるし、かつ前提である。
- (3) 金(かね)、貨幣とは、価値あるものを交換する行為 = 理性と能力と信頼を前提とし、それらを証明する行為の蓄積反復から生まれた交換媒体である。まさに人間の能力のシンボルである。「金が諸悪の根源」という俗説は、金を物神化しているからこそ生まれるものである。金の発生と機能の根源を考えれば、金は素晴らしいものなのだ。
- (4) ただし、世界には、自らの知力体力の発揮 = 労働によって価値あるものを生産できる人間(ビジネスマン)と生産できない人間(ある種の知識人と怠惰な愚民)が存在する。生産できる人間は、生産できない人間によって寄生され、自らの知力体力の発揮 = 労働によって生産された価

値あるものを略奪される。このような正当な交換が実行されないこと、蹂躪されること、個人の知力体力の発揮 = 労働により生産し獲得したものに対して持つ権利 = 所有権が無視されることのほうが、歴史では圧倒的に多かったし、政治体制として続いてきた。王制、貴族制などは、みなそうである。アメリカ合衆国は、王制、貴族制を捨てて、自らの知力体力の発揮 = 労働によって価値あるものを生産できる人々によって建国された史上初めての唯一の国家である。

以上のように、アイン・ランドが考える資本主義は、相互利益のある合意に基づいた自由で自主的な交換関係に焦点を置く。搾取や略奪が介在しない人間関係が問題とされる。「人間」が中心なのだ。資本主義ではあるが、資本が中心ではない。ランドは何度も、「たかり」、略奪によって生きる者たちへの怒りを表明している。ランドの資本主義観の前提となる世界観は、「世界は、自らの力で生産する者と、他人の生産物にたかって生きる者が相克する場所」であり、「歴史は、他人の生産物にたかって生きる者から、自らの力で生産する者を解放するプロセス」なのだ。この意味において、アイン・ランドの資本主義は、道徳であり美德であり、かつ「いまだ厳密には実現されていない理想」である。ランドにとっては、過去の資本主義も現在の資本主義も、みな似非資本主義である。一般に資本主義がもたらす問題や、その結果のひとつとしての社会主義の台頭は、資本主義体制が内包する問題が原因なのではなくて、資本主義が足りないから、生じるのである。資本主義は、それらの真実が人々に理解されていない「いまだ知られざる理想」なのである。

ただし、この点においては、ランドはあまりに当たり前のことを指摘していると言える。資本主義にせよ、社会主義にせよ、理論は思考モデルなので、現実の諸相にあてはめれば、すべての主義、理論は、どこまでいっても「未完のプロジェクト」にならざるをえない。現実、理論モデルで処理できるほど単純なものではない。

この問題はさておいて、ともかくにも、アイン・ランドの資本主義観は、

アイン・ランドの資本主義観
反ビジネス文学風土の中でビジネスマンを祝福する *Atlas Shrugged*

特異である。他のどの資本主義擁護論とも一線を画している。たとえば、「原子論的・個人主義」(田中 65)と批判されるアダム・スミス (Adam Smith) よりも、はるかに個人主義的である。スミスは、少なくとも、国の富を増加させると一種の「強国論」として『国富論』を書いたという点において、国家の富 (national wealth) というものを考えている点において集団主義的である。また、ランドの資本主義観は、マックス・ヴェーバー (Max Weber) の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の宗教的倫理の俗化という文脈とも関係がない。ランドの資本主義観と似ている自由市場を支持する前述のハイエクやルードヴィヒ・エドラー・フォン・ミーゼス (Ludwig Edler von Mises) やマーレイ・ロスバード (Murray N. Rothbard) のオーストリア学派経済学とも違う。前提が違う。彼らは、経済というメカニズムは、人工的計画によって制御したり誘導できるものではなく、市場に任せただけで、結果として有効に展開するという功利主義的理由から自由市場を支持している (Sciabarra 284)。しかし、ランドは、資本主義が「道徳」だから、支持しているのだ。

アイン・ランドの支持するところの資本主義は、「資本主義」と言うより、「ヒューマニズム」と呼ぶほうが妥当に思えるほどに、かくも原理的であり、根源的である。皮肉にも、実は、アイン・ランドの資本主義観は、カール・マルクス (Karl Marx) やフリードリッヒ・エンゲルス (Friedrich Engels) などの社会主義者たちと、前提にある問題意識を共有している。マルクスにしても、ランドにしても、起源にあるのは、公平さ、fairnessが実現されない世界への怒りである。人間が自らの知力体力の発揮 = 労働によって獲得し生産したものが搾取される事態に甘んじなければならないことへの怒りである。マルクスは、そこから資本家と労働者、個人の人間の信義、道徳、美德を問題にするのではなく、人間を問題にするのではなく、資本、労働、商品の仕組みを考察し、計画経済を支持した。ランドは、あくまでも個人の生き方に焦点を置き道徳を説き、マルクスは、メカニズムを問題にして、システム構

築を問題にした。同種の怒りから出発したのにランドとマルクスの結論が違うのは、文学者と社会学者の違いだからだろうか。

しかし、あくまでも人間、個人の生き方に注目する作家の発想だからこそ、アイン・ランドの「資本主義礼賛寓話」は、読まれ続けてきたし、これからも読まれ続けると筆者は考える。いかほどに素朴で原理的で根源的過ぎて非現実的な資本主義観であろうと、アイン・ランドは、どんな政治経済体制であろうと、それを維持させ機能させるのは、人間の友好的な社会関係の根底にあるものは、人間間の「信頼」(trust)であること、つまり道徳であることを、あらためて読者に認識させる。企業と国家繁栄を支えるのは「高信頼社会」であることを説いたフランシス・フクヤマ (Francis Fukuyama) の *Trust* (1995) の趣旨とランドの資本主義観は重なっている。ソ連の社会主義も、システムそのものの不備というより、その理論の欠陥というより、そのシステムや理論に人間性に対する理解が不足していたからこそ、70年もの間にわたり人間的腐敗を進行させ、モラル・ハザードとアノミーを蔓延させ、国民に絶望と廃類のみ与えたことによって、崩壊したと考えられる。

かつて2001年12月にエンロン(Enron Corporation)が破綻したとき、*Atlas Shrugged*が、あらためてアメリカのビジネスマンによって読み直されたという事実があった。エンロンは、アメリカ合衆国テキサス州ヒューストンに本拠地を置き、総合エネルギー取引とITビジネスを行う企業だった。2000年度、全米売上げ第7位という大企業に成長し、2001年には21000名ほどの社員を抱えていたのだが、その内実は、巨額の負債を不正経理・不正取引で隠蔽するものであった。絶え間ないinnovationに挑戦し、価値ある物やサービスを生み出して、消費者に提供するのが企業であり、ビジネスの根本だったのに、あくまでも実体経済が主であったのに、いつのまにかアメリカのビジネスマンは、価値あるものとサービスを提供することによってではなく、株価操作によって企業の評価を高めることを求めるような本末転倒なマネーゲームに一喜一憂する状態になった。そのような虚業的ビジネスの退廃と背徳性を、エンロンの破綻は、アメリカのビジネスマンに、あらためて知らしめ、自信

アイン・ランドの資本主義観
反ビジネス文学風土の中でビジネスマンを祝福する *Atlas Shrugged*

と指針をなくしたビジネスマンが、自分たちの原点、使命を思い出し、再認識するために、*Atlas Shrugged*を読み直したというのである。

ちなみに、*Atlas Shrugged*を、小説というより、「自己啓発書」として分類するT・バトラー＝ボードン (Tom Butler·Bowdon) のような論者もいる (Bowdon 326)。1991年に、国会図書館 (The Library of Congress) とブック・オブ・ザ・マンズ・クラブ (the Book of the Month Club) は、共同で「あなたが人生で最も影響を受けた本」の読者調査 (ビジネスマン対象) をしたが、第1位の聖書の次に、*Atlas Shrugged*が第2位を占めた。これらの現象は、*Atlas Shrugged*が、アイン・ランドの美德としての資本主義観を表現するための小説であるからこそ、起きることである。

この点から鑑みても、本論の初めに言及したアイン・ランドに対する「新自由主義加担」批判は、的はずれである。新自由主義とは、デイヴィッド・ハーヴェイ (David Harvey) のことばを借りれば、「強力な私的所有権、自由市場、自由貿易を特徴とする制度的枠組みの範囲内で個々人の企業活動の自由とその能力とが無制約に発揮されることによって人類の富と福利がもっとも増大すると主張する政治経済実践の理論」(Harvey, 2) である。この理論にしたがって、1979年のアメリカのレーガン政権とイギリスのサッチャー政権は、財政難と経済的沈滞の打破のために、企業に対する政府の規制緩和と、社会福祉の多くの領域からの国家の撤退、民営化を推し進めた。情報技術の発展につれて形成され、時間と空間の両方において圧縮したグローバル市場は、大企業の独占と企業の多国籍化を促進した。先進国における、より安い人件費と収益を求めての国内産業の空洞化が進行した。

確かに、グローバリゼーションは、国内的にも、国家間においても、階級格差を拡大させたかもしれない。社会的使命を忘れて営利のみ追求する大企業のやりたい放題を許す部分があるのかもしれない。額に汗して価値あるものを生み出すのではなく、パソコンの端末操作で利益を得ようとする金融資本主義、サイバー資本主義を生み出してしまったのかもしれない。これらの新自由主義批判の根拠と意図は理解できる。しかし、アイン・ランドは、こ

のような類の資本主義を支持したことなどないのだから、また彼女の提唱する資本主義は、ヒューマンイズムと呼び変えてもいいほどの個人の尊厳ある生き方を基本に置いた倫理的なものなのだから、彼女を新自由主義批判の文脈から論じるのは、間違いである。

そもそも、サイバー資本主義だの金融資本主義だのと言っても、やはり世界は実体経済で支えられている。たとえば、韓国の自動車産業である。欧米の自動車製造業者が「世界中で走っている日本車をソウルでは見かけない。韓国車ばかりだ」と、韓国市場の閉鎖性を指摘したことがあった。そのとき、韓国側は「韓国車といっても中身は日本製部品ばかりである」と答えた。なぜかといえば、韓国は財閥第一主義の大企業はあっても、優良な中小企業が育っていないからである。自動車の部品のような小さく精巧な製品を絶えず改良し製造して大企業に提供するのは、現在でも中小企業である（『選択』37）。
アイン・ランドが祝福し寿いだのは、そのような、自らの知力体力の発揮＝労働によって価値あるものを生み出す（19世紀的）企業家的ビジネスマンなのだ。ドン・デリーロ（Don DeLillo）の*Cosmopolis*（2003）の主人公のような、円キャリー・トレード（低金利である円を借入れて、円を売ってより高い利回りとなる外国の通貨、あるいは外国の通貨建ての株式、債券などで運用して「利ざや」を稼ぐ行為）のような金融操作によって、資産形成するようなビジネスマンが寵児になるような時代と精神（の劣化）など、アイン・ランドにとっては想像外のものだった。

（付記）

本論は、2008年5月25日に広島大学で開催された日本英文学会シンポジウム第7部門「資本主義とアメリカ文学」において口頭発表したものに加筆訂正したものである。

アイン・ランドの資本主義観
反ビジネス文学風土の中でビジネスマンを祝福する *Atlas Shrugged*

参考文献

- Binswanger, Harry. ed. *The Ayn Rand Lexicon: Objectivism from A to Z*. New York: New American Library, 1986.
- Bloom, Allan. *The Closing of the American Mind*. New York: Simon & Schuster, 1987. 『アメリカン・マインドの終焉』菅野盾樹訳、みすず書房、1988年
- Brawer, Robert A. *Fictions of Business: Insights on Management from Great Literature*. New York: John Wiley & Sons, Inc, 1998.
- DeLillo, Don. *Cosmopolis*. New York: Scribner Book Company, 2003. 『コズモポリス』上岡伸雄訳、新潮社、2004年
- Elliot, Emory. ed. *Columbia Literary History of the United States*. New York: Columbia UP, 1988. 『コロンビア米文学史』コロンビア米文学史翻訳刊行会訳、山口書店、1997年
- Flory, Claude Reherd. *Economic Criticism in American Fiction.: 1792-1900*. 1937. New York: Russel & Rissel, 1969.
- Friedman, Milton. *Capitalism and Freedom*. Chicago: U of Chicago P, 1962.
- Fukuyama, Francis. *Trust: the Social Virtues and the Creation of Prosperity*. New York: Free Press, 1995. 『「信」無くば立たず』加藤寛訳、三笠書房、1996年
- Gladstein, Mimi Reisel. *The New Ayn Rand Companion, Revised and Expanded Edition*. Westport: Greenwood Press, 1999.
- Harvey, David. *A Brief History of Neoliberalism*. Oxford UP, 2005. 『新自由主義 その歴史的展開と現在』渡辺治監訳、森田成也、木下ちがや、大屋定晴、中村好孝訳、作品社、2007
- Hayek, Friedrich A. *Capitalism and the Historians*. 1954. 『資本主義と自由』村井章子訳、日経 B P、2008年
- Hoberek, Andrew. *The Twilight of the Middle Class: Post-World War II American Fiction and White-Collar Work*. Princeton: Princeton UP, 2005.
- Hofstadter, Richard. *Anti-Intellectualism in American Life*. New York: Vintage, 1962. 『アメリカの反知性主義』田村哲夫訳、みすず書房、2003年
- Horner, Carl S. *The Boy Inside the American Businessman: Corporate Darwinism in Twentieth-Century American Literature*. Lanham: UP of America, 1992.
- Jerry A. Varsava "The 'Saturated Self': Don DeLillo on the Problem of Rogue Capitalism". *Contemporary Literature* XLVI, 1, pp. 78-107.
- King, Stephen. *On Writing: A Memoir of the Craft*. New York: Pocket Books, 2000.

- Koontz, Dean R. *How to Write Best Selling Fiction*, Cincinnati: Writer's Digest Books, 1981.
- Lawrence, D. H. *Studies in Classic American Literature*. William Heinemann, 1924. Harmondsworth: Penguin, 1971.
- Olster, Stacey. "Something Old, Something New, Something Borrowed, Something (Red, White, and) Blue: Ayn Rand's *Atlas Shrugged* and Objectivist Ideology" In *The Other Fifties*. Ed. Joel Foreman. Urbana: U of Illinois P, 1997, pp. 288-306.
- Parks, Lynn A. *Capitalism in Early American Literature: Texts and Contexts*. New York: Peter Lang, 1996.
- Paterson, Isabel. *The God of Machine*. G. P. Putnam, 1943. New Brunswick: Transaction Pub., 1993. 5th prt, 2003.
- Rossiter, Clinton Lawrence. *Conservatism in America: Thankless Persuasion*. New York: Random House, 1955. 1982. 『アメリカの保守主義 伝統と確信の交錯』(アメリカ思想史叢書14) アメリカ研究振興会訳、有信堂、1964年
- Rand, Ayn. (a) *The Fountainhead*. Indianapolis: Bobbs-Merrill, 1943. New York: New American Library, 1993. 『水源』藤森かよこ訳、ビジネス社、2004年
- (b) *Atlas Shrugged*. New York: Random House, 1957. New York: New American Library, 1992. 『肩をすくめるアトラス』脇坂あゆみ訳、ビジネス社、2004年
- (c) *For the New Intellectual: The Philosophy of Ayn Rand*. New York: New American Library, 1961.
- (d) *The Virtue of Selfishness: A New Concept of Egoism*. New York: New American Library, 1964.
- (e) *Capitalism: The Unknown Ideal*. New York: New American Library, 1967.
- (f) *The Romantic Manifesto: A Philosophy of Literature*. New York: New American Library, 1971.
- (g) *The Journals of Ayn Rand*. New York: Plume, 1999.
- Smith, Adam. *The Wealth of Nations*. 1776. New York: Bantam Dell, 2003. 『国富論』上下、山岡洋一訳、日本経済新聞社、2007年
- Sciabarra, Chris Matthew. *Ayn Rand: The Russian Radical*. University Park: Penn-

アイン・ランドの資本主義観
反ビジネス文学風土の中でビジネスマンを祝福する *Atlas Shrugged*
sylvania State UP, 1995.

Szalay, Michael. *New Deal Modernism: American Literature and the Invention of the Welfare State*. Durham: Duke UP, 2000.

Taylor, Walter Fuller. *The Economic Novel in America*. North Carolina UP, 1942. New York: Octagon Book, Inc, 1964.

Watts, Emily Stripes. *The Businessman in American Literature*. Atlanta: U of Georgia P, 1982. Washington D. C.: Beard Books, 2004.

Zayani, Mohamed. *Reading the Symptom: Frank Norris, Theodore Dreiser, and the Dynamics of Capitalism*. New York: Peter Lang, , 1999.

Zimmerman, A. David. *Panic!: Markets, Crises, and Crowds in American Fiction*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2006.

足立幸男 『政策と価値 現代の政治哲学』 ミネルヴァ書房、1991年

アマール、ブルーノ 『五つの資本主義 グローバリズム時代における社会経済システムの多様性』 山田鋭夫、原田裕司ほか訳、藤原書店、2005年

折島正司・平石貴樹・渡辺信二編 『文学アメリカ資本主義』 南雲堂、1993年

古富晃 『ビジネス英語を速く読む』 光文社、2000年

古村治彦 「リバタリアニズムに関する一考察」1999年度早稲田大学大学院社会科学
研究科修士論文、未刊

副島隆彦 『世界覇権国アメリカを動かす政治家と知識人たち』 講談社、1999年
『連鎖する大暴落』 徳間書店、2008年

田中敏弘 『アメリカの経済思想 建国期から現代まで』 名古屋大学出版局、2002年

著者不明 (雑誌一般記事) 「歩み出した李明博「冷静外交」」 『選択』 第34巻第5号、2008年

藤森かよこ 「危険なフェミニストの冷戦ナラティブ」 山下昇編著 『冷戦とアメリカ
文学21世紀からの再検証』 世界思想社、2001年、100-125頁

「アメリカ国民作家になったロシア亡命移民女性 アイン・ランドの『肩
をすくめたアトラス』」 『国際文化論集』 第24号 桃山学院大学総合研究所、
2001年

「儲ける<女> *Atlas Shrugged*が寿ぐ美徳の産物としての貨幣」 『英語青年』 2005年11月号

ボードン、T・バトラー 『世界の自己啓発50の名著』 野田恭子、森村里美訳、Discover
社、2005年

ポー、ミシェル 『資本主義の世界史』 筆宝康之、勝俣誠訳、藤原書店、1996年

ロスバード、マーレイ・N 『人間、経済及び国家』 上下、吉田靖彦訳、青山社、2001

年

- マルクス、カール著・エンゲルス編『資本論』全5巻、マルクス=エンゲルス全集刊
行委員会訳、大月書店、1967年
- 的場昭弘『超訳『資本論』』祥伝社、2008年
- 森村進『自由はどこまで可能か リバタリアニズム入門』講談社、2001年
- 森村進編『リバタリアニズム読本』勁草書房、2005年
- 山形浩生「Book Review: Ayn Rand, *Atlas Shrugged*」『CUT』2000年5月号
- ヴェーバー、マックス『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』上下、梶山
力、大塚久雄訳、岩波書店、1955年